



特別編 米遠征記 Vol.14 report 山下 知且

マスターズ 日本勢は予選通過ならず

USBCマスターズとPBAワールドシリーズに参戦するために、3月21日に成田空港を出発して渡米したことは先月号で書きました。今月号では、USBCマスターズ挑戦の様態を中心にお伝えします。

マスターズの予選は1日5ゲームずつ、3日間の15ゲーム。3日間のうち、2日間はメンテしたてのフレッシュオイルで投球し、残りの1日は、前のシフトの人たちが投げたあとのコンディション(Burnといいますが)となります。

個人的には難易度が非常に高い、長めのコンディションに苦労しました。レーン変化が少ない序盤は、タイトにラインを取りすぎると厚めにいってスプリット、幅を取りすぎるとこ

れも薄めのスプリット。レーンが変化して2~3ゲーム目からは、そんなに難しく感じないのですが、ポケットにいくと⑩ピン、そして⑦⑩もよく出ました。一方Burnのときは、手前のオイルのブレイクダウンが激しく、ディープインサイドからタイトに投げるのではなく、手前から出さないといけないところを、うまく投げられずに苦労しました。

上位の選手たちは、ブレイクダウンしてくると、手前から大きくボールを出したり、また回転の少ない選手はその角度で投げるために、スピードをうまくコントロールして投球していました。

日本勢の中では、84位タイ(1,407ドル獲得)の川添奨太

プロが最高位で、残念ながら予選通過はなりませんでした。

優勝は、PBAのDeeRon Booker選手。RPM380前後で、決して回転が多いタイプではありませんが、絶妙なスピードコントロールと、常に冷静沈着な投球で、アメリカ系アメリカ人では史上3人目のツアータイトルホルダーになりました。

USBCマスターズ終了後、われわれはPBAワールドシリーズが開催されるミシガン州デトロイトに移動しました。PBAワールドシリーズは複数の試合で構成されます。ロス/ホルマンPBAダブルス選手権、PBAチーター選手権、PBAスコピオン選手権、PBAシャーク選手権、そしてPBA世界選手権です。

まず初戦はロス/ホルマンPBAダブルス選手権に出



▲ワールドシリーズの会場にて、PBAの殿堂入りをしているランディー・ピーダーセンを囲んで記念ショットの日本選手団。前列左から藤井、山下、ピーダーセン、川添、後列左から藤村、井口、高田

場するためのPTQ(選抜大会)です。日本勢は藤井信人・川添ペア、藤村隆史・高田浩規ペア、井口遼太と私のペアで出場。37チーム中18チームが選抜通過できるPTQを、藤井・川添ペアが5位で見事本戦に進出しましたが、井口・山下ペア

が25位、藤村・高田ペアは31位で、残念ながら本戦出場はなりませんでした。

ちなみにワールドシリーズのうちのシャーク選手権で、川添プロがタイトル獲得にあと一歩まで迫ったことは、すでにご承知の方も多いと思いますが、そのシャーク選手権を含むワールドシリーズの様態は、次号でお伝えします。



▲ワールドシリーズの会場で、PBAエリートリーグを観戦



▲マスターズ期間中に、ストーム社のスタッフと食事会

やました・ともかつ
1982年12月5日生まれ、長崎県出身。2000年~2011年ナショナルチーム在籍。2023年6月から長崎県スポーツ協会理事。全日本ボウリング協会理事。2023年4月から長崎県連副理事長。2022年からIBFアスリート委員。

新連載 “放浪プロコーチ”有元勝の 日々是転究ノ旅

第1回 シニアだってカッコよく投げたい!

職業、1年365日ホテル暮らしのボウリングプロコーチ。

2011年5月に「日本初のプロコーチ」という大きなプレッシャーのかかるネーミングをいただいてから、早いもので14年目を迎えます。北は北海道から南は沖縄まで、初級者からプロ、小学生から80代のグランドシニアまで、全国のボウラーにセミナーやコーチングを行っており、毎日どこかのホテルからボウリング場に通う日々を重ねています。

この13年間で、コーチング理論やノウハウの進化はもちろん、コロナ禍を機にオンライン講座やアーカイブの導入を始めるなど、手法や取り組み方も日々変わってきてはいますが、基本的な部分は「今よりも正確に投げる方法」と「今よりも1本でも多くピンを倒す方法」の2点に集約されます。

正確に投げるには再現性の高い投球動作が必要となり、1本でも多くピンを倒すには球速や回転数、アクシスローテーション、アクシスチルト等の投球動作と関係する球質の部分のほかに、オイルパターンに対するアジャストや、それらにマッチするボールの選び方に関係する、ボールの性能やレイアウト等の知識が必要になります。

そのために、投球動作のコーチングやアジャスト法、ボールについての座学講習も全国各地で開催しています。また、カラダやメンタル、トレーニングやストレッチ等のボウリングに必要なジャンルの専門家をお招きしてのボウリングキャンプを、2015年から年6~10回のペースで9年間継続開催中です。

そんな活動を続けてきて、大きく変わってきたと感



ありもと・まさる / 1964年12月11日生まれ、福岡県出身。指導歴29年のプロコーチ。AMBA(有元メソッド・ボウリングアカデミー)代表



▲ツアーハンド最高齢受講者・68歳の鈴木誠さん(東京)



▲74歳の女性受講者・三浦照美さん(福岡)

じる受講者の傾向は、やはりツアーハンド(両手投げ)選手の増加。ツアーハンドはカラダの負担が大きく、若い世代の投球スタイルという意見が大半ですが、現在のコーチング受講者のなかにはツアーハンドのシ

ニアボウラーが6名おり、最高齢は68歳です。基本的な動作が理解できれば、年齢性別を問わずツアーハンド投球は可能ですし、むしろ膝や腰のトラブルが軽減するケースも多々あります。

さらにそれを上回るのが、シニアボウラーの急増です。しかもシニア層の男女比は女性の方が圧倒的に多く、「カッコよく美しく投げたい」という要望がほとんどです。シニアには肩を開いたスイングやハイバックスイングは無理という意見もありますが、このケースでも華麗に変身を遂げた70代のボウラーがいっぱいますし、ケガの心配どころか「肩の痛みや凝りが解消されて、楽に多くのゲーム数が投げられるようになった」というボウラーが増えています。

方でプロボウラーの受講者は、若い世代よりも「センターのお客様のために知識を身につけたい」という、ドリルや指導を活動のメインとしている中堅やベテランの男子プロが増えてきました。

そんな私が「どこの地区のどんなセンターで、どんな選手にどんなコーチングやセミナーを行っているのか?」を、本紙読者のみなさんのお役にも立つ情報を織りませながら、毎月お話しさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いたします。

※タイトル内の“転究”とは転球(ボウリング)と探究、すなわち「ボウリング探究」の意味を含めた本紙編集者の造語です。